

30年代東京の展示空間、画廊と美術館

Exhibition Space in the 1930s Tokyo: Galleries and Museums

五十殿利治／Toshiharu OMUKA

近代日本美術史を考える上で、美術作品が展示される空間は、1930年代においてようやくその骨格が形成されたといえる。つまり、公的な空間としての美術館でいえば、関東大震災で大破して、公募して案が決定した帝室博物館復興本館が開館するのが1939年となるので度外視するとしても、竹の台陳列館を受け継いだ公募展の一大拠点であった1926年開設の東京府美術館は1929年から展示室がほぼ倍増して、ますます重きをなすようになった。また同系統の美術館として、大正記念京都美術館（1933年開館）、大阪市立美術館（1936年開館）が加わる。これに展示室を設け、帝国美術院附属美術研究所が置かれる黒田記念館（1928年竣工）、さらに東京美術学校陳列館（1929年竣工）も活動している。

その一方で見逃せないのは、画廊の台頭である。1930年初めの銀座については石井亜矢子氏による研究があり、日動火災のビルに開店した日動画廊など、新興画商の動きがある一方、現在まで続く資生堂ギャラリーをはじめ、松屋、松坂屋など百貨店、朝日新聞社など、すでに多様なスペースがあったことを明らかにしている。その後も、教育機関の拡充に伴って青年美術家が求めた、いわゆる貸画廊が台頭した。この動向は銀座派とも呼ばれ、重要な拠点となったのは銀座紀伊國屋書店の階上である。これに続いて、さまざまな画廊が開店し、当時普及しはじめた「前衛」の動きを支えることになるのである。長谷川三郎が「展覧会の中心が上野から銀座へ移ったさうである」と述べている通りの状況があった。しかし、日中戦争によって銀座派は大きな打撃を被り、まさに場を失うことになった。

*本発表は、科学研究費（A）「美術市場とその国際化に関する制度論的、交流史的研究。西洋から日本・アジアへの展開」による研究成果の一部である。

【発表者プロフィール／Profile】

筑波大学特任教授。独立行政法人国立美術館理事。

1951年東京都生まれ。1975年早稲田大学第一文学部卒業。北海道立近代美術館学芸員を経て、1985年筑波大学芸術学系講師。専門は近代美術史。1995年「大正期新興美術運動の研究」により毎日出版文化賞奨励賞。2017年筑波大学を定年退職、同特命教授・名誉教授、東根市美術館芸術監督。2018年「非常時のモダニズム」により芸術選奨文部科学大臣賞。